と見ゆれば（ラドロフ氏著 Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte）之に縁ある語にて「欄」「檻」の意と見るべきならんか。

(14) bataγl(ï)lγ は Osman 語にて「沮洳の地」の意なることラドロフ氏のトルコ語方言集に見ゆ、此の意味より圈に對せしめたるものなり。第七十二行には沮洳地の意味に用ゐたり。

(15) xašïnčïγ はラドロフ氏譯普門品第六十行にも見え uluγ 即ち「大」と同意に用ゐ、漢文の「巍々」に當れども氏の說ける如く、語原明らかならず。[Gabain は恐るべきと譯せり。T. T. VI 22. 91]

(16) bašlaqu は baš（頭）を語原として「導く」なる意なれば今 bašlaqučï を以て「導く人」「統率する人」の義に譯せり。

(17) ur(u)nguluq(?) は余の知らざる語なり、漢文よりすれば「幡」に相當するものなること明らかなり。

(18) irbiz. 此の語は第八十九行には irbis と見ゆ、ラドロフ氏の書によれば irbis は Teleut 語にて Luchsart（山猫の類）の義なりと見ゆ、豹に對しては華夷譯語には玉子、舍兒孫等の語を當てたれども、此處にては irbiz を以て譯したるものなること疑なし。

(19) kidin とは元來「後ろ」の義にして、東に對して「後ろ」即ち「西」をいへるものなり、而して次の「北」なる語に對しても同じく此の語を用ゐたるは、「南」に對する「後ろ」の義に外ならず、なほ南北の兩者は東方を標準として、右方（bärigärü）を南、左方（yirgärü）を北と呼ぶことありて（Rodloff, alttürkischen Inschriften der Mongolei, S. 238）本書第二百三十五行にも北・南に對して irdin, birdin なる語を用ゐたり。

(20) yarašmazï はラドロフ氏のトルコ語方言集に、yarasmak—Frieden machen, sich geziemen と譯せる語より出でたるものなるべく、本書第二百七十八、二百七十九、二百八十行等に於て見るが如く、「相應する」「適應する」の意に用ゐたり、此處にては「禁諱」に對せしめたるものなるべけれど、何故にかゝる語を用ゐしかを知らず。

(21) at は「名」、「名譽」、yol は「道」の義なり、名詞を二個並べ記する時、前者が形容詞の性質となることは屢々存する例なれば、此處にても「名を成すの道」、「名譽の道」の義と見得べく、以て「仕官」に對せしめたるものなるべし、畢竟仕官が名を成すの道なりしに因るなるべし。Uigurica, II. 19[18] 及び Knan-ši-im Pusar 12, 47 にも「宰官」に對せしめて atluγ yüzlüq...körki 即ち「名譽あり、權威ある……身」と記せるも此の考に外ならず、されど、また考ふべきは、本書第三百七十一行に「官位」に對して等しく at yol の語を用ゐたれど然も此等の兩語を各第三格として atγa yolγa と記せり、これによれば兩語は共に獨立せる名詞にして at は形容